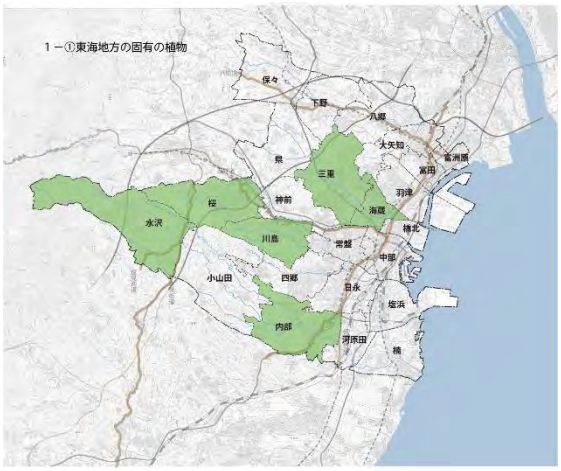
四日市市の歴史文化の特徴（概要）（素案）

Ⅰ　自然とともに生きる、海、山、川の恵み

本市は、国定公園である鈴鹿山系の緑豊かな樹林、丘陵地の里山、河川や湿地、海岸など、多彩な自然環境があります。また、環境に対する意識も高く、自然を守る活動も行われています。

①東海湖と東海地方の固有の植物

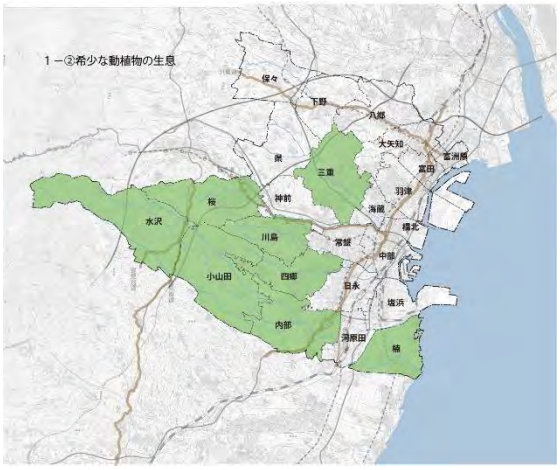
500～200 万年前に、現在の伊勢湾あたりに東海湖という巨大な湖がありました。地殻変動により現在は消滅しましたが、湖岸付近には、東海地方固有の植物を見ることができます。伊勢湾周辺の地殻変動や気候の変化を考えるうえで、貴重な植物もあります。市内には、御池沼沢植物群落やイヌナシ・アイナシの自生地、シデコブシ群落などがあげられます。



②水辺に生息する希少な動植物

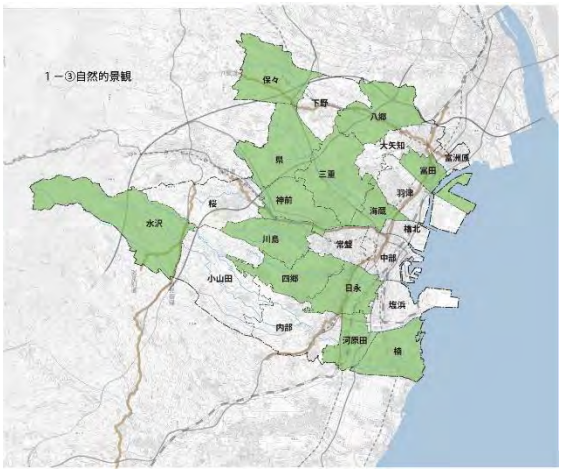
市内の川、海岸、水田、湿地には、多様な生物が息づいています。吉崎海岸では、ウミガメの産卵がみられ、三重県の県鳥で、絶滅が危惧されているシロチドリの営巣地としても貴重な海岸です。川や水田、湿地には、カスミサンショウウオやホタル、トンボなどが、身近に生息しています。

また、湿地では弱酸性貧栄養の環境に適応した植生が成立しています。



③自然景観

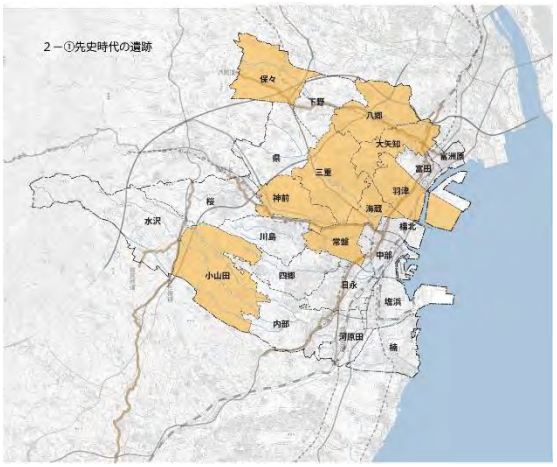
市内には、宮妻峡・もみじ谷に代表される景勝地や地形を活かした忘帰處、河川や河岸沿いに整備された桜並木などの自然景観が見られます。それぞれ、歴史的な物語を有しており、翡翠谷のように場所にまつわる伝承もあります。近年になると、ダムなどの人工物と自然とが織りなす新たな景観がつくり出されています。



Ⅱ　遺跡が伝える人々の暮らし

市域では、先史時代より人々の暮らしがみられ、多くの遺跡が発掘されています。なお、遺跡は市域の西側に偏り、海岸線が現在より内側に入り込んでいたこともあって、海岸側には遺跡は少ないです。

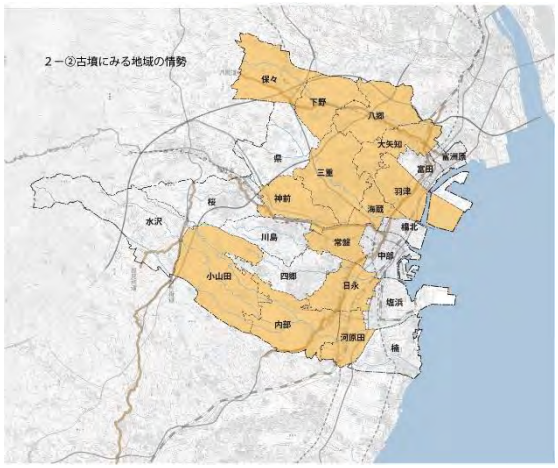
①先史時代の人々の営みを伝える遺跡



旧石器・縄文遺跡は、概ね水沢地区を中心とする内部川扇状地面に集中して立地しています。後期旧石器時代のナイフ形石器群が、南西部の内部川と鎌谷川に挟まれた扇状地に立地する内戸谷Ｂ遺跡や宮蔵遺跡・宮ノ上遺跡・西野遺跡などで確認されています。縄文遺跡は約 40 カ所確認され、縄文時代創成期の有舌尖頭器が出土しています。

弥生時代は、市域のほぼ全域にわたって、低地を望む丘陵上に集落が営まれるようになりました。弥生時代の遺跡は 72 カ所に上っています。銅鐸が出土しており、弥生時代中期に銅鐸祭祀が行われていたことを示しています。

②古墳にみる地域の情勢

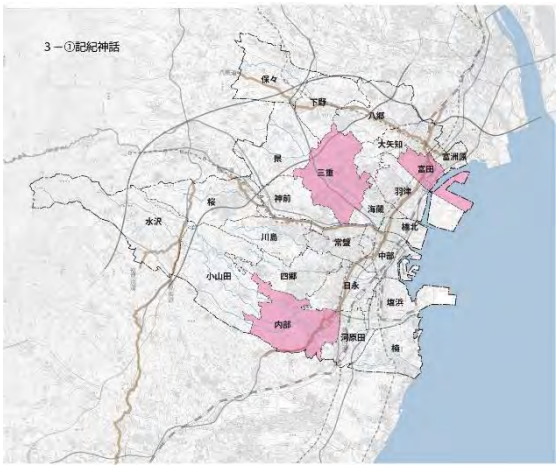


市内には、200 基にも及ぶ古墳があります。市内唯一の前方後円墳としては、4 世紀後半の志氐神社古墳があります。5 世紀の古墳は、市域の北部である朝明川の流域に分布しています。5 世紀末から 6 世紀にかけ、市域のほぼ全域に分布するようになります。6 世紀から 7 世紀にかけては、横穴式石室をもつ古墳群や横穴墓群が多く造られます。

Ⅲ　古代史の舞台

古くはヤマトタケルの伝説が残ります。東国へつながる要衝となり、壬申の乱等で、四日市地域の古代の姿を垣間見ることができます。8～10 世紀には、地域へ仏教文化の広がりが見られ、古代の地方社会が形成されてきます。

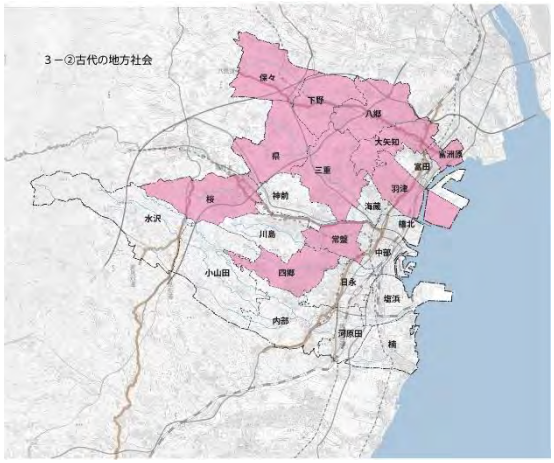
①記紀神話の舞台



ヤマトタケルが東国を平定し、帰途につく途中、病にとりつかれ、伊勢国に入りました。三重郡采女村あたりまで来たとき、急坂を杖をついてようやく登れたので、その坂を「杖衝坂」と言ったということです。坂の上には、御血塚社があります。衰弱した身体で坂の上に辿り着いたヤマトタケルが、足下を見ると出血していたので、この場所で血を洗い落として止血したとされます。さらに、少し進んだとき、「吾か足三重の勾なして、いたく疲れたり」と言い、その地を「三重」と言うようになったとも伝えられており、三重郡の由来といわれています。能褒野（現在の亀山市内）にたどり着いたところで亡くなったので御陵をつくると、ヤマトタケルは、大きな白鳥と化して、大和をめざして飛び去っていったということです。

富田という地名は、白鳥になって「とんだ」から来ているといわれています。富田の鳥出神社、富田一色町の飛鳥神社は、どちらも鳥が出る、鳥が飛ぶ、というので、このヤマトタケルノから来ているといわれています。

②朝明郡の郡家の成立と古代地方社会の発展



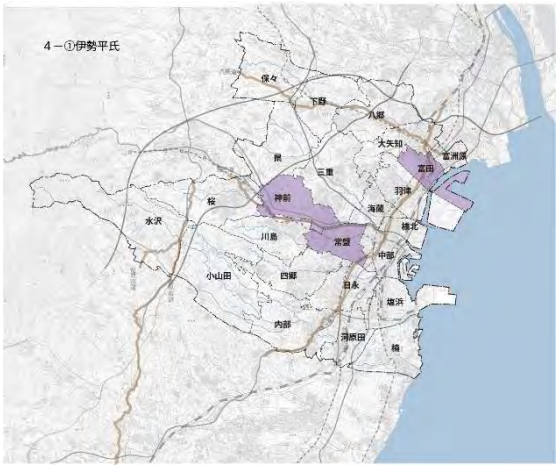
久留倍官衙遺跡は、朝明郡の役所の遺跡であり、古代律令国家の地方支配体制を具体的に示すものとしてきわめて重要です。天武天皇元（672）年、壬申の乱の際に大海人皇子が朝明郡に立ち寄ったといわれています。また、天平 12（740）年、聖武天皇は伊勢に行幸した際に、朝明郡に泊まったといわれ、その際に詠まれたという歌が万葉集にあります。

智積廃寺は市内最古の仏教寺院遺跡で、壬申の乱の功績の証として、天武政権からの援助で建立されたと考えられます。その後、仏教文化が地域に広がるとともに、古代の地方社会が発展していきました。

Ⅳ　いまに伝わる市と武士の支配

平安から鎌倉時代には伊勢平氏の活躍の舞台でしたが、南北朝、室町時代になると、様々な武将が入り交じって城を築きました。市内には、38 カ所の城館が存在したといわれています。京都や伊勢など様々な地域へとつながる道があったこの地は、戦略上重要な場所でした。織田信長の北伊勢侵攻によりほとんどが滅ぼされ、あるいは軍門に下りました。

①伊勢平氏の活躍

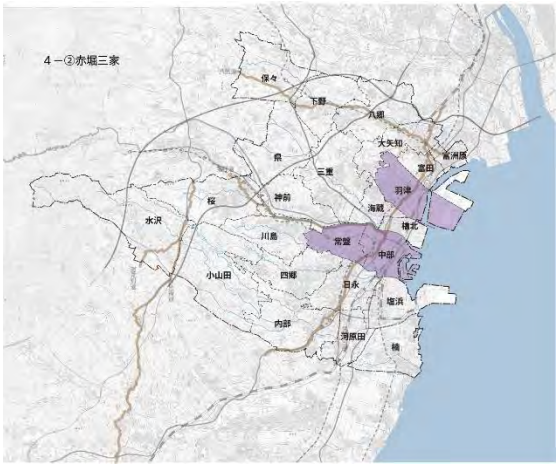


承平５（935）年の平将門の乱の後、将門を討った平貞盛らが伊勢国に移り住み、一族が伊勢国に定着しました。これが「伊勢平氏」の起こりです。平安から鎌倉時代には伊勢平氏の活躍の舞台でもありました。

富田城の前身は、元久元（1204）年の三日平氏の乱の際に伊勢平氏の一党である進士三郎基度が、富田六郷の東西富田の地に築いた居館とされています。

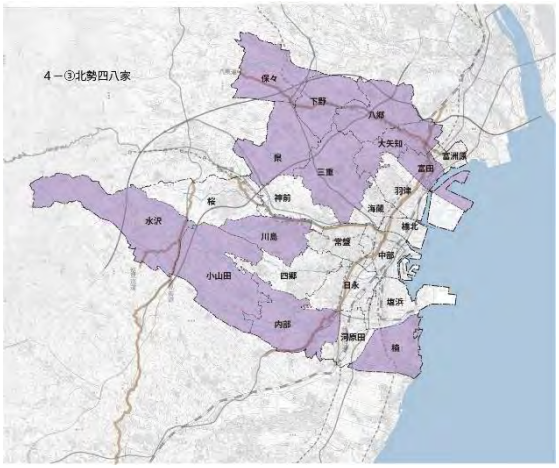
また、源義経の従者、伊勢三郎義盛は伊勢国三重郡の出身といわれ、義経が兄頼朝に追われ九州へ向かう途中、鈴鹿山で自刃したと伝えられ、川島の西福寺境内にその墓があるといわれています。

②赤堀三家による統治



応永年間（1394～1428）、田原孫太郎景信が上野国赤堀庄から移り赤堀城を築きました。景信は、長男の盛宗を羽津に、次男の秀宗を赤堀に、そして三男の忠秀を浜田に配しました。文明年間に三家に別れ、赤堀三家は、北勢地方で勢力を誇りました。

③北勢四十八家による勢力争い

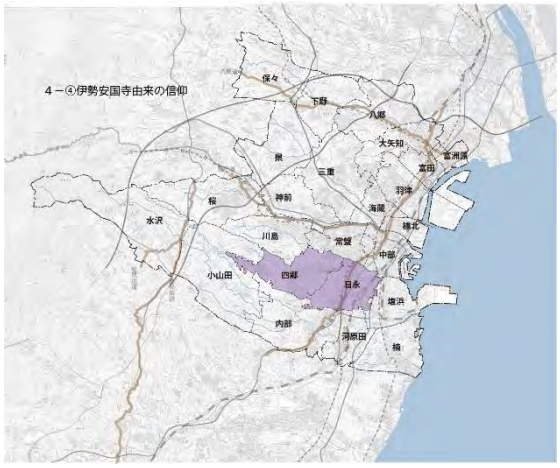


戦国期において、北勢地方では、大きな勢力の武将は存在せず、四十八家といわれる小規模の城主・豪族が城を構え、争いを繰り返していました。

この時代の城の多くは、周囲に空堀を巡らせ、土塁で建物の周りを囲んだものです。小高い山や丘の上などに建てられ、周囲が見渡せ、攻められにくい立地でした。一方で、平地に造られた城もありました。

織田信長の北伊勢侵攻が永禄 11（1568）年にありました。信長の家臣、滝川一益が率いた大軍により、多くの武将は軍門に下り、国侍たちは織田氏に服属して北勢四十八家は滅びました。

④伊勢安国寺由来の信仰



安国寺は、南北朝時代に足利尊氏・直義兄弟が後醍醐天皇をはじめ元弘の変以降の戦没者の冥福を祈るために、全国に建てられた寺院で利生塔とよばれる塔と一組で造られました。伊勢安国寺は、延暦 19（800）年創建の五位鳥山西明寺を前身としたと伝えられています。室町時代には、寺域 1 万平方メートル、寺領高千石余と隆昌を極めましたが、元亀 3（1572）年、滝川一益の兵火により滅亡したと伝えられています。

伊勢安国寺の僧坊で兵火を免れた総持庵を顕正寺にあてたと伝えられています。寺宝には、阿弥陀如来像などがあり、永代経などが催される際に文化財として公開されています。

⑤「四日市」の起り

平安時代以降、天然の良港によって回船業が発達し、京都やその周辺での生産物を尾張より東の方へ販売するために中継拠点としての役割を果たします。

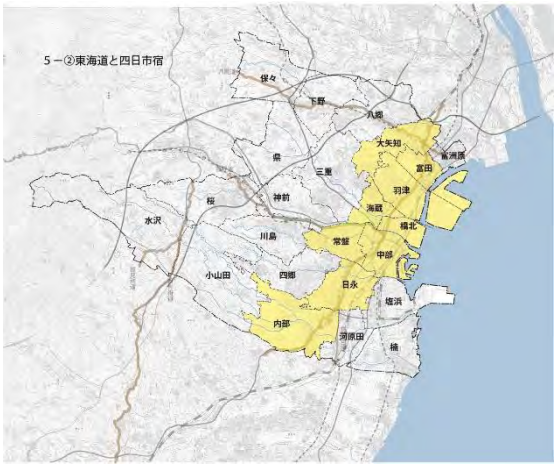
室町時代には、田原美作守忠秀は、領内の農業や手工業を盛んにし、商品の流通を図るため、東海道を海岸に沿うように移して、交通の便を良くするとともに、その北寄りに十字の大道を作り、市を形成しました。文明５（1473）年 の外宮庁宣案には「四ヶ市庭浦」の地名が出てきています。室町時代後期には、四日市と称して毎月４日･14 日･24 日の３回定期市が始まり、これが四日市の名の起りといわれています。こうした四日市の発展には、海陸両路の交通の便が良いなど、四日市の地の利が大きく影響していると考えられます。

Ⅴ　江戸の面影と街道の往来が生んだ文化

江戸時代、市場町・湊町の四日市に「宿場町」「陣屋・代官所の町」が加わり、北勢の行政・商業の中心地として知られるようになります。

東海道の宿場町となり、参勤交代や伊勢参宮など、人・物の往来がますます活発になりました。また、海上交通においても天然の良港を拠点に多くの回船が行き交い、陸海交通の要衝、商業のまちとして大いに繁栄しました。

①幕府と大名による支配

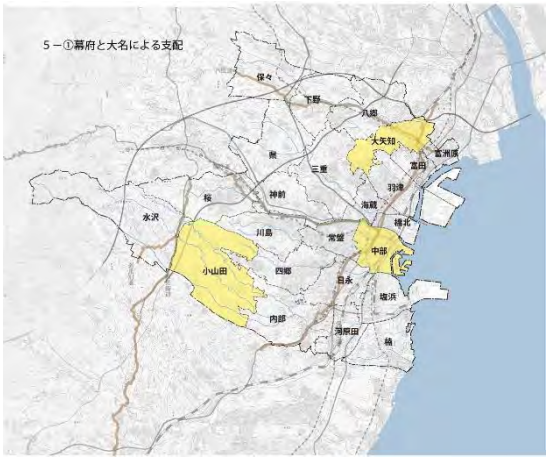


本能寺の変の時に、和泉国（大阪府）の堺にいた徳川家康が、伊賀を越え、三河国に帰るためにたどりついたところが四日市の浜辺だといわれています。橋の上で、陸路にしようか海路にしようか考えを巡らせていたため、その橋は「思案橋」と呼ばれています。家康自身が交通の要衝であると認めたため、江戸幕府が開かれると、四日市は天領となり、代官が配置されました。

文政６（1823）年、桑名藩松平氏は、武蔵国忍への転封を命じられましたが、員弁郡・朝明郡・三重郡の一部地域３万７千石はそのまま残され、忍藩の飛地となりました。忍藩は、大矢知村に陣屋を構えました。

また、江戸時代の水沢は、菰野藩に属しており藩主土方氏が景勝の地として保全に尽力したといわれています。藩主が領内巡視の際、水沢の常願寺に立ち寄り、この寺でお茶を飲み、この村の茶業を奨励したともいわれています。

②東海道と四日市宿の繁栄

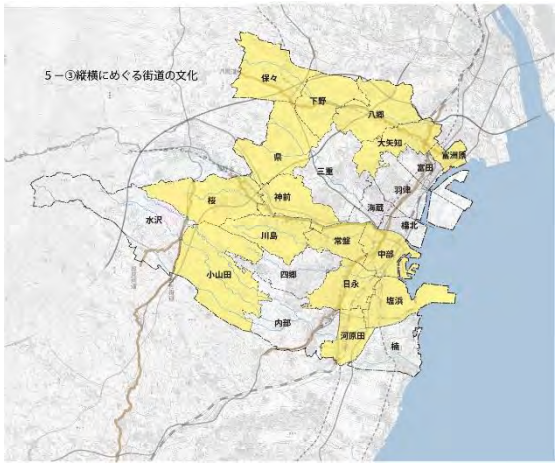


東海道五十三次のうち 43 番目の宿として栄えました。本陣や宿駅も設置されました。本陣２軒、脇本陣１軒、旅籠 98 軒がありました。「四日市宿本陣清水家文書」は、四日市宿の一番本陣を務めた清水太兵衛家に関わる文書群で、四日市陣屋は、江戸幕府が天領である四日市を管理するために設置した代官所です。

同時に、四日市湊は、江戸と京との水陸連絡地点として重要な商業港となり、北勢の商業の中心地となりました。

現在も、街道沿いには、歴史的建造物（町家）の町並みが残り、日永一里塚跡など、往時の人々の往来を伝える文化財が数多く点在しています。

③縦横にめぐる街道の往来



いくつもの旧街道が縦横にめぐっており、道沿いには道標や常夜燈などの文化財が多く残っています。

伊勢街道・参宮下街道は、伊勢神宮へつながります。

また、巡見道とは、江戸時代に幕府の巡見使の通った道のことです。

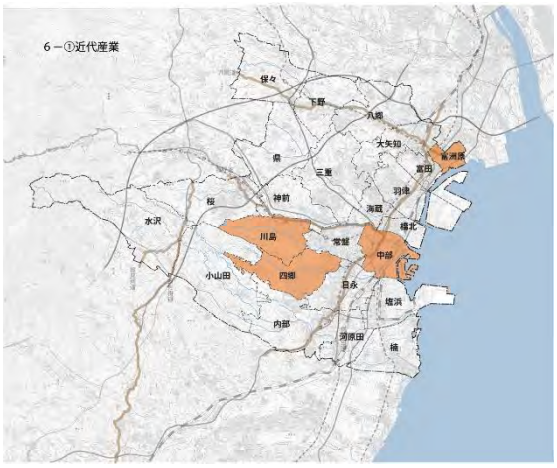
八風道は、鈴鹿山脈の八風峠を越え、現在の滋賀県に続き、東海道と中山道の短絡路となっていました。

菰野道は、東海道四日市宿と菰野一万石の城下を往来する道で、城下町や湯の山を訪れる旅人をはじめ、 参勤交代で江戸に向かう菰野藩主も通りました。

Ⅵ　産業都市の礎

近代にはいると、近代産業がおこり、四日市港の発展とともに、商業のまちから産業都市へと発展していきます。

①近代産業の発祥と四日市港の発展

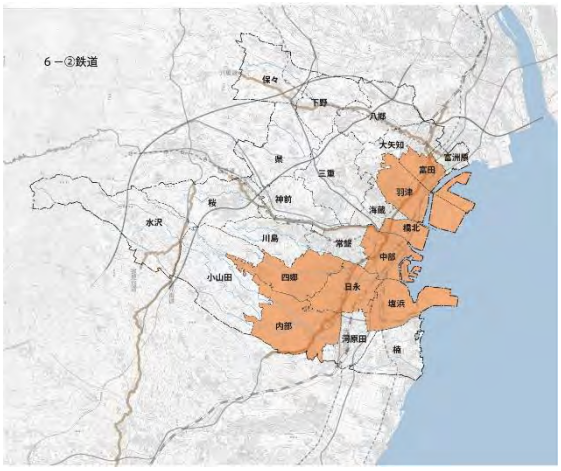


幕末から近代にかけて、四郷地区では、製糸、製茶、醸造、その他関連産業が盛んになり、本市の近代産業発祥の地として栄えました。

伊藤小左衛門や伊藤伝七は、工場の機械化や海外への輸出など産業の近代化という時代の流れを読み取り、渋沢栄一の支援を得るなどして事業を拡大し、起こしたいくつかの企業は現代にも継承されています。また、学校の創設や役場建設の寄付などでも地域社会に大きく貢献したことから、今でも住民に敬われる存在となっています。

四郷の産業は、四日市港とともに発展しました。明治 6（1873）年、稲葉三右衛門らは四日市港築造工事に着手し、明治 32（1899）年に伊勢湾で最初の開港場に指定されると、紡績をはじめ、製糸、漁網、製陶など、さまざまな産業の輸出拠点となり、近代産業の発展を支えました。

②鉄道の発達



明治 23（1890）年、市街地東縁に関西鉄道（現・JR 関西本線）の四日市駅が開業しました。それまでの町の中心は、宿場町として東海道沿いでしたが、鉄道の開業により次第に駅と諏訪神社を結ぶ地域へと移っていき、発展していきました。

大正元（1912）年には、商工業が盛んであった四郷村と四日市市内とを結ぶために、三重軌道が今の四日市あすなろう鉄道八王子線である八王子まで開業しました。その支線（鈴鹿支線）として、大正 11（1922）年に日永から内部まで延伸され、現在のあすなろう鉄道内部線も開通しました。

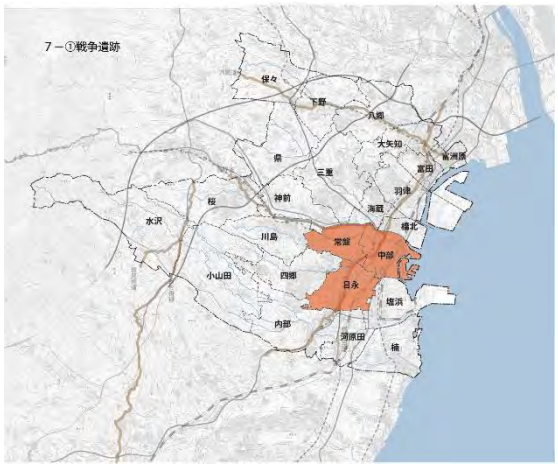
大正 13（1924）年に伊勢電気鉄道（後の近鉄名古屋線）津 － 四日市間が開業、関西鉄道と平行する形で現在のＪＲ四日市駅前へ乗り入れました。

Ⅶ　戦後の都市形成

海軍施設や軍事工場が立地していた本市は、第二次世界大戦で大きな被害を受けました。多くの歴史文化が失われることになりましたが、それを乗り越え都市を形成してきました。

①戦災を伝える戦争遺跡と復興都市計画

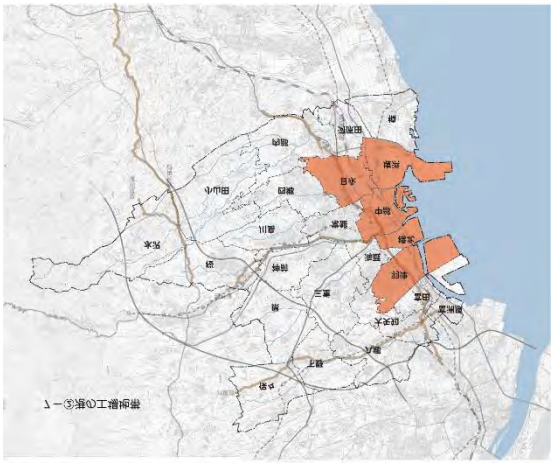
昭和 20（1945）年 6 月 18 日に四日市空襲では、大きな被害を受けました。当時の市域の 35％にあたる 3.18 ㎢が被災し、多くの寺社、歴史的施設も焼失しました。臨海部に立地する第二海軍燃料廠（昭和 16 年操業）と周辺の軍需工場が攻撃目標でした。鵜の森公園内には四日市空襲殉難碑があります。



本市では、戦災復興都市計画を実施、計画は壮大なもので、戦災で廃墟となった都市の復興を行いました。中心部では、現在の近鉄四日市駅とＪＲ四日市駅を結ぶ大通りや商業地区、公園などが整備されました。

②港の工場地帯（コンビナート）

第二次世界大戦後、工業都市のプランが描かれ、市では積極的な工場誘致政策が行われました。昭和 34（1959）年に、海軍燃料廠の跡地に日本で最初の大規模な石油化学コンビナートが塩浜地区に誕生したのを端緒として、午起地区、霞ケ浦地区の水面を埋め立て、それぞれ第 2、第 3 コンビナートが稼働しました。



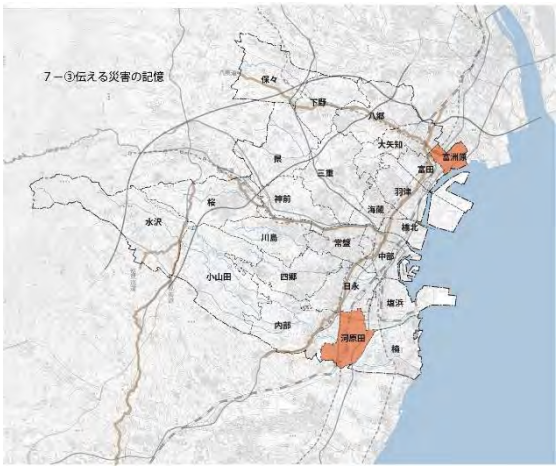
これらの石油化学工場は高度経済成長を歩み出した日本経済の象徴ではありましたが、排出された硫黄酸化物による大気汚染や水質汚濁、悪臭などの大きな公害が発生しました。

現在は、環境が改善され、産業の発展と環境保全を両立したまちづくりへの取り組みを行っています。また、美しい工場夜景としてクルーズ船が遊覧するなど、観光資源としても活用されています。

③伝える災害の記憶

昭和 34（1959）年 9 月 26 日に上陸した伊勢湾台風は、本市に大きな被害をもたらしました。富田一色海浜緑地公園内には伊勢湾台風殉難慰霊碑が建立され、毎年、慰霊献花式が行われています。

また、水が豊かな本市は水害との戦いの歴史が繰り返されてきました。河原田地区では、万治２（1659）年の内部川、鈴鹿川の大洪水により、川沿いの村が大きな被害を受け、村の場所を移したと伝えられています。



Ⅷ　地域に根ざす産業

市内では、それぞれの地区で地域に根ざした地場産業が生まれ、東海道、四日市港を中心とした往来・流通を通して、発展してきました。

①萬古焼

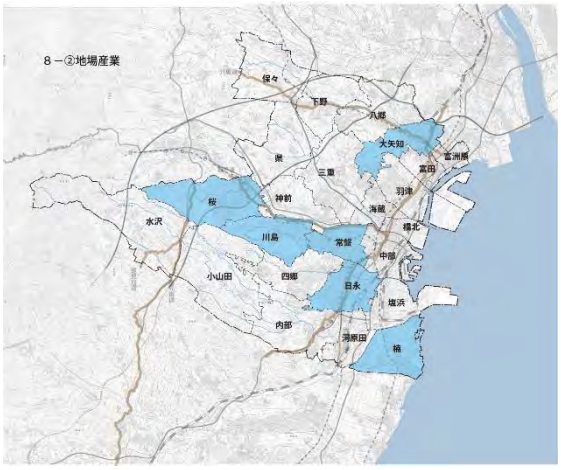
萬古焼は、江戸時代中期に桑名の豪商・沼波弄山によって始まりました。末永村の村役だった山中忠左衛門は、東阿倉川の唯福寺で 20 年の研究の末、明治６（1873）年に陶法を確立させ、村人に道具と陶土を与えて指導し陶工を育成しました。

四日市港や鉄道の整備に伴い、萬古焼は国内だけでなく、輸出も盛んに行われ地場産業としての基盤が築かれました。昭和 54（1979）年、「四日市萬古焼」は当時の通商産業大臣から伝統的工芸品として指定されています。

毎年、5 月の第 2 土日には、「四日市萬古まつり」が開催され、全国からたくさんの人が集まります。

港があり、燃料である石炭を入手しやすかったこと、貿易港として流通に適していたこともあって、全国有数の陶磁器の産地として発展を遂げました。

②自然環境と人の交流が育んだ地場産業



本市の気候や豊かな水を背景に、また街道を行き交う人々との交流を活かして、地場産業が生まれ発展してきました。

大矢知地区では、鈴鹿おろしと朝明川の清流という気候と風土に恵まれ、かつ豊富な小麦を近隣地域から調達できたことから、江戸時代末期から素麺作りが盛んに行われています。

江戸時代、農閑期に農家の人々が副業として作り始めた日永うちわは、お伊勢詣りの土産物として好評を博していました。日永は東海道と伊勢街道の分岐点であり、1 日に往来する人の数は多い時で 1 万人にのぼったといわれ、茶屋や旅籠が軒を連ねて賑わう中、「日永うちわ」・「なが餅」・「日永足袋」は日永の 3 大名物と呼ばれました。

また、常磐地区にある製薬業の加藤翠松堂は、室町時代末期の 1570 年に創業しました。江戸時代には、時の関白二条家より直参調薬所としてのお墨付きをもらい、「二条殿御薬所」として宮中をはじめ、全国的に秘伝の民間薬や漢方薬を販売していました。

③漁業と産業

海岸部では漁村が形成され、明治期以降、漁業技術が発展してきました。近海での底引き網や船引き網漁業が中心で、ヨシエビ・ガザミ・イワシ・コウナゴなどが水揚げされています。楠地区では、海苔の養殖とハマグリの蓄養が盛んです。特にハマグリの蓄養は国内のおよそ7割を取り扱っていて、楠漁港は取り扱い日本一です。

漁業を背景に魚網製造は江戸末期から富田、富洲原地区を中心として発達してきました。現在も、日本の水産業を支える魚網生産の拠点となっています。また、磯津、天ヵ須賀では水産加工も盛んです。

④茶業

水沢、小山田、川島では茶畑が広がり、伊勢茶の栽培が行われています。土地の水はけがよいこと、雨量が豊富で温暖な気候であることなどお茶づくりに適した気候・土地です。

水沢のお茶は、飯盛山浄林寺（現・一乗寺）の住職である住持某が、空海が唐から帰国した際に持っていた茶の実を雲母峰の南側にある冠山茶ノ木原に植えたことが始まりといわれています。

江戸時代にお茶の栽培は減少しますが、江戸後期に常願寺の住職、中川教宏によって再興しました。教宏は宇治の茶業を見て帰村し、まず水沢三本松の大畑に茶園を作ります。さらに宇治から良質の茶の実を持ち帰って植栽し、茶師を招いて技術を開発、普及させることによって水沢の茶業の振興に努めました。

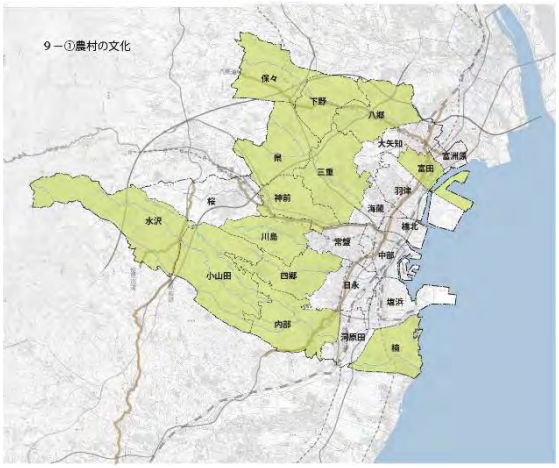
Ⅸ　暮らしに息づく祭礼文化

暮らしの中で、信仰にもとづき多様な祭礼文化が生まれ、受け継がれてきました。中には、地域内外から多くの人が訪れる祭礼行事へとつながるものも見られます。

①農村の暮らしを支える文化

農村では、日常の暮らしのなかの食文化や、一年間のサイクルをつくる年中行事、一生の中の人生儀礼などが行われ、人々の暮らしを支えるとともに、地域のつながりを支えてきました。

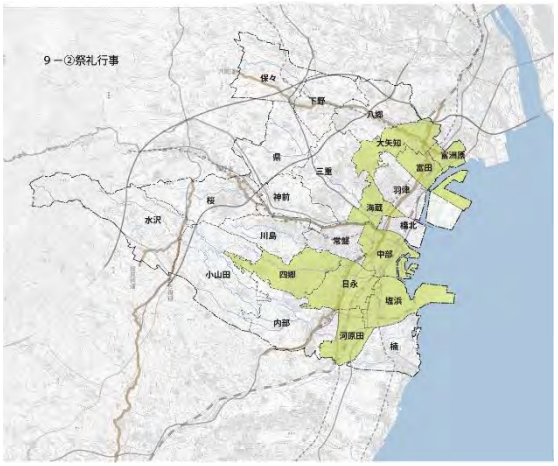
八郷汁などの郷土食、正月行事である大鏡餅神事や粥試し神事、害虫駆除・五穀豊穣を願う虫送り、地蔵盆などの盆行事、亥の子など現在にも継承されているのもあります。



②祭礼行事

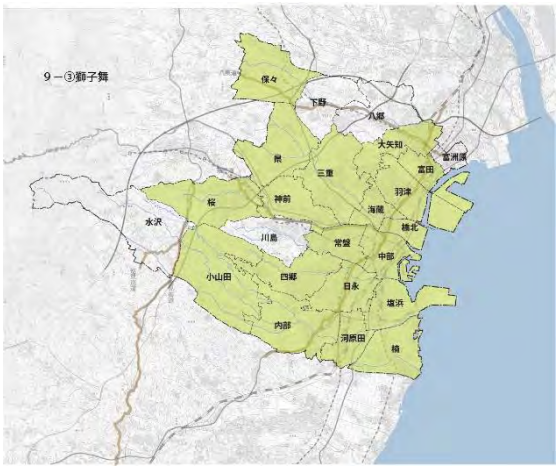
諏訪神社の例祭は、からくり山車が出されていました。山車は町場である中心部のほか、日永、馳出など、街道沿いのムラを中心としてありました。雨乞いを願う太鼓踊りは、水沢地区に伝えられています。桑名市で発達した石取祭車は、明治時代以降、桑名が取車を新造すると、その古車を買い求め広がっていきました。市内でも明治期以降実施されています。念仏行事としては、東日野・西日野に伝わる大念仏があります。

大四日市まつりは、昭和 39（1964）年から始まる市民祭であり、「郷土の文化財と伝統芸能」と題して市内各地の祭礼行事を紹介しています。



③獅子舞

北勢地方では、獅子舞が生活の中に息づいており、氏神の祭礼に獅子舞を奉納しているところが数多くあり、市域で獅子舞が絶えてしまったところも含めると 40 カ所余りに及びます。市内でみられるのは囃子と口取りが舞う神楽獅子舞と、神楽獅子舞に曲芸などの放下芸を取り入れた大神楽の二つの系統に大別できます。



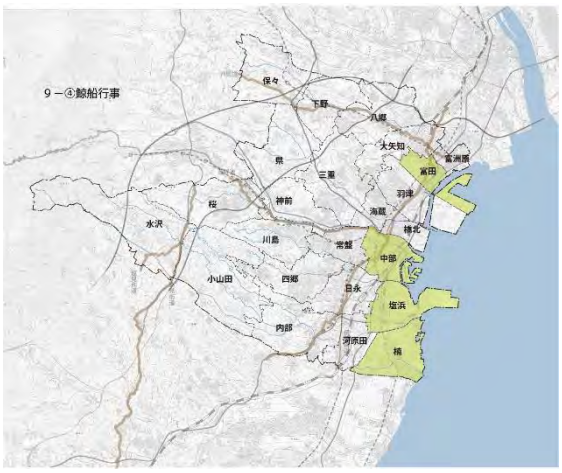
神楽獅子舞は、現在の鈴鹿市に本拠がある箕田流、山本流、中戸流、稲生流が伝わったといわれています。

また、室町時代に始まったとされる伊勢大神楽は、海蔵神社がその発祥地で諸国を巡ったとされています。

④鯨船行事

本市を中心とした北勢地方に分布する、陸上の模擬捕鯨行事です。鯨を豊穣の象徴とみなし、これを仕留める演技を行うことによって大漁や富貴を祈願した行事です。

4 艘の鯨船山車が継承されている富田地区の鳥出神社の鯨船行事は、ユネスコ無形文化遺産に登録されており、中部地区には 2 艘、塩浜地区及び楠地区には各 1 艘の鯨船山車が伝わります。市外では唯一、鈴鹿市に 1 艘が伝承されています。



Ｘ　水とともに築かれた歴史文化

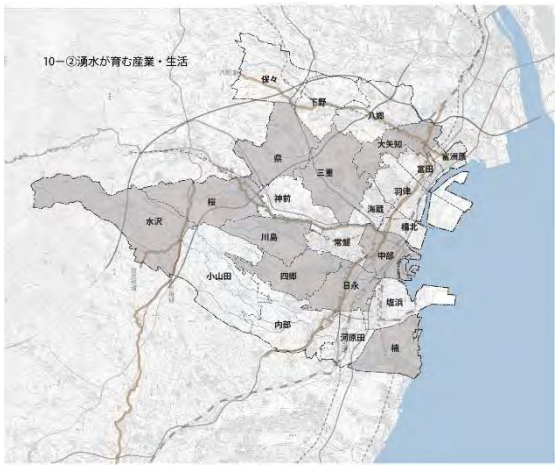
本市は豊かな水を利用して、人々の暮らしや産業に恵みをもたらせてきました。その一方、人の生命や財産を守る治水の歴史もあるなど、様々な水との関わり方をしてきました。

①伝承にまつわる水（池泉・河川）

市内には、伝承が伝えられる水辺が多くあります。三重地区のヤマトタケル足洗池、大矢知地区の聖武天皇鏡ヶ池跡、神前地区の和泉式部化粧の水のほか、弘法井戸があります。

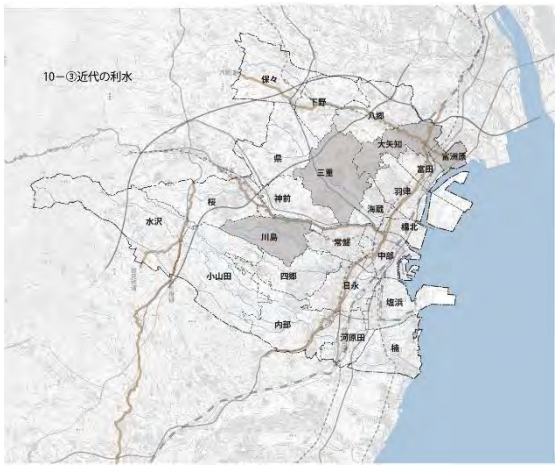
②清らかな水が育んだ醸造文化と暮らし

本市の酒造りは、古くは奈良時代から造られていた記録も残っています。「伊勢米」と呼ばれる全国の米相場を左右したほど良質な米の産地であったことに加え、清らかで水量豊富な伏流水が鈴鹿山脈から流れ込み、冬の鈴鹿おろしと呼ばれる寒風が山を吹き抜けたことにより、地酒が造られてきました。味噌・醤油などの醸造も行われ、全国的に流通するものもあります。



また、良質の地下水に恵まれていることにより、水質が良く水量も豊かな泗水の井戸がありました。現在も水道水源の多くが、市内を流れる各河川の流域地下水を利用しています。

③近代の利水の歴史

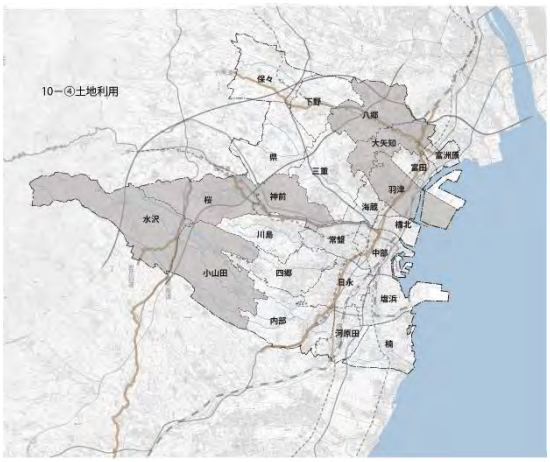


四日市港の外国航路開設に伴い、船舶への給水施設の必要から、大正９（1919）年「四日市給水株式会社」が設立され、生桑町に本市初の水源地が設けられました。

それでもなお、市民のほとんどは井戸水に頼っていましたが、衛生面重視の風潮から、昭和３（1928）年に本市は四日市給水株式会社の施設を買い受けて、本格的な上水道事業を始めました。

三重郡富洲原町も昭和３年６月～昭和４年４月、大矢知村に水源地を建設して上水道を布設しました。合併によって、水源地としては、生桑水源地とあわせて２水源により給水されるようになりました。

④用水整備による安定的農業の実現



市内には水利に恵まれず、干ばつの被害に見舞われている地域もありました。灌漑事業は過酷な条件で行われることもあり、サイホン式水路、マンボ、三十三間筒などが活用されてきました。

水沢地区は水の便が悪く、水不足により田畑はもとより、飲み水にも困っていましたが、江戸時代初期、村名主「辻久善」が村人と協力し長い年月をかけて全長２キロに及ぶ「瀬戸用水」を完成させ、現在も水沢中の田を潤しています。お諏訪おどりは、辻久善への感謝の気持ちで踊り始めたといわれており、市指定文化財となっています。

智積養水は環境省選定の「名水百選」に選ばれ、鯉が泳ぐ清流は地域の誇りとなっています。羽津用水は大矢知街道に並行して流れ、まちなかの景観に寄与しています。